

日本中古天台文献の考察(二)

——日蓮の『立正観抄』の真偽問題について——

花野充昭

鎌倉新仏教諸師の思想と日本中古天台教学との関連を具体的に解明するためには、その前提として両者の文献考証がなされなければならない。すなわち、鎌倉新仏教の諸師について云えば、著作の真偽考証が必要であり、中古天台について云えば、文献の時代設定が必要である。両者の文献考証は、実は密接に結びついているので、その研究方法としては次の二が考えられる。その一は、鎌倉新仏教諸師の著作を通して、中古天台教学の発達史(具体的には中古天台文献の成立年代)を推定するという方法であり、他の一は、中古天台文献の時代設定を通して、逆に鎌倉新仏教諸師の著作真偽を考察するという方法である。鎌倉新仏教諸師の著作の中で、真撰と認められる書については、その所説を通して中古天台文献の成立年代を推定することが可能である。然るに真偽未決書については、それができないばかりか、反対に中古天台文献の時代設定を通して、その真偽が考察されることになる。ここでは

具体的に日蓮の『立正観抄』を取り挙げて、中古天台教学との関連を考察し、以つて中古天台文献の時代設定をなす際の一助としたいと思う。

『立正観抄』は真蹟が現存しないが、古来日蓮の真撰と認められてきた。然るに近年に至り、浅井要麟氏はその成立に疑義を提出された。すなわち浅井氏は、昭和十三年六月に発表された「慧檀両流と日蓮聖人の教学」という論文の中で、止観勝法華説は尊海(一一五三～一三三二)の創唱であるから、日蓮(一一三二～一二八二)がこの説を引用できるはずがないとして、止観勝法華説のみえる『立正観抄』は偽書であろうと提言されたのである。この提言は当時大きな反響を呼び、同年十二月には小林是恭氏が浅井説を補強する意図において、「最蓮房賜書管見」という論文を発表されている。小林氏はその中で、現在身延に蔵されている『立正観抄』の古写本には、奥書に「正中二年乙丑三月於洛中三條京極最蓮房之

本御自筆有人書之、今于時正中二年乙丑十二月二十日書写之、身延山元徳二庚午卯月中旬重写也」とあり、これが日蓮の孫弟子であり、身延の第三世である日進（一二七〇～一三四六）の古写本であると伝えられていることから、本抄は日蓮の真撰とみて間違いないとする説もあるが、身延の古写本が果たして本当に日進の書写であるか否かは批判を要するとして、凡そ次の如く述べられている。奥書の解釈の仕方によつて意味の取りようも異なるであろうが、それは「正中二年（一三二五）三月に、京都三條京極で、最蓮房へ授与された宗祖御自筆の立正観抄を、或る人が書写した。いま日進が同じ年の十二月二十日に転写した。それを身延山に於て元徳二年（一三三〇）卯月中旬に重ねて写し直した」という意味に取れるであろう。然らば、日進は果たして正中二年に京都で本抄を書写したであろうか。日進は永仁三年二十五歳の時には、京都に滞在したことが伝えられているが、正和二年四十三歳の時に日向の後を承けて身延に住したので、それより十二年後の正中二年五十五歳の時に、果たして京都へ行つたかどうかは疑問である。日進は正中二年には、『日蓮聖人御弘通次第』を述しているが、それは恐らくは身延での執筆ではなかつたか。又日進と交渉の深かつた中山三世日祐（二九八～一三七四）の『本尊聖教録』に、『立正観抄』の事が少しも記されていないことも不審である。日祐は祖書の蒐集に力を注ぐと共に、殆ど

毎年身延に登詣していることから、若し日進に『立正観抄』の写本があつたとすれば、日祐がそれについて何か記しているはずである。ところが日祐の『本尊聖教録』には、『立正観抄』のことが何ら記されていないことは、日進の書写自体を疑わしむものである。かくして小林氏は、身延に蔵されている『立正観抄』の古写本は、後世の者が名を日進に仮りて、書写したものであらうと推察された。

このような『立正観抄』偽作説に対して、最初に反論を試みられたのが山川智応氏であつた。山川氏は同じく昭和十三年の十二月に、『立正観抄に対する疑義について』という論文を発表され、その中で『立正観抄』の真偽論を文献的考察と歴史的考察の二面から論述された。文献的考察としては、まず身延の古写本が果たして本当に元徳二年のものであるかどうかを調査することが先決である。日祐の『本尊聖教録』に『立正観抄』が収められていないからと云つて、それが直ちに偽作論の根拠にはならない。何となれば、日祐は身延と相当に交通していたにも拘わらず、『本尊聖教録』には身延に蔵する真蹟御書でさえ、その全部は収められていないからである（例えば『光日房書』の如き）。又『立正観抄』が「録内」に収録されているという事実は、少くとも日蓮滅後百数十年後の頃には、日蓮各派において、これを遺文とするに異論のなかつたことを示している。その文章についても、日蓮

の文章としてとりたてて疑うべきものはないから、真撰と認めるにやぶさかでない。又歴史的考察としては、止観勝法華説は尊海の創唱に非ずして、日蓮と同学の静明の創唱である。日蓮は最蓮房を通してこの静明の新説を聞き及び、それを破折されたのが『立正観抄』である。このように考えれば『立正観抄』は日蓮の真撰と認めてよいことになる。これが山川氏の所論である。

ところがさらに昭和十五年十二月に至ると、林宣正氏が「止観勝法華思想と仙波教学」という論文を発表され、再び『立正観抄』の偽作説が主張された。すなわち林氏は、止観勝法華説の創唱を静明の弟子で尊海の師に当たる心賀と見なし、日蓮が心賀の新義を破折することは年代的に不可能であるとして、浅井要麟氏の偽作説を擁護されたのである。

このように『立正観抄』の真偽論は、当初偽作説が優勢であつたが、その後身延山所蔵の『立正観抄』古写本の調査が行なわれ、それが日蓮の直筆であることが証明されるに及んで、一転して真撰説が優位に立つた。すなわち影山堯雄氏は、昭和二十六年に発表された「最蓮房について」という論文の中で、最蓮房の実在せることを強調すると共に、日進書写の『立正観抄』の奥書によつて、最蓮房が佐渡赦免後、京都へ帰つたことを論証されている。又宮崎英修氏も、日進の古写本の現存することから、『立正観抄』の真偽を疑うこと

は妥当ではないと主張されている。

然るに『立正観抄』の日進書写が証明された現在、なおもその真偽を疑う学者がいる。田村芳朗先生は止観勝法華説を静明ごろの成立とされるから、この点においては『立正観抄』は疑われない。しかし『立正観抄』には、当時の天台宗において止観勝法華説からさらに進んで禅勝止観の説まで起きたことが述べられており、或いは天台大師自筆と伝える「灌頂玄旨血脈」とか、それに対する伝教大師の註と称する口伝書が引用されている。これらの思想、乃至は口伝書が、すでに日蓮の時代に存在していたかどうかは疑わしいとして、田村先生は畢竟するところ『立正観抄』の真撰たることを認められていない。又浅井円道先生は、真如論の説かれる日蓮遺文に『当体義抄』『日女御前御返事』『立正観抄』『成仏法華肝心口伝身造抄』『説誦法華用心抄』『万法一如抄』等があるが、その中で前三書は真偽未決であり、他の書は偽書であるとして、畢竟、日蓮には真如縁論が皆無であつたと主張されている。これは実質的に『立正観抄』偽作論に他ならない。これら両先生の偽作論について、次に私の意見を述べてみよう。

『立正観抄』の日進書写が明らかでなかつた昭和十年代に、思想内容からの真偽論が浅井氏・山川氏等によつて交わされることはやむを得ないまでも、日進本の存在によつて文獻的

に真撰たることが確實となつた現在、これを思想的に疑うことは甚だ非であると云わざるを得ない。思想的に疑義を挿まんとするならば、まず文献的に偽書の可能性を論ずることが必要である。文献的に偽書の可能性があり、その上で、思想的にも問題があるというのが、偽書説を主張する際の必要条件である。然るに『立正観抄』は文献的に偽書の可能性が殆ど無い。文献的に偽書説を云う場合、それはいつごろ、どういふ立場の人が、何のために偽作したかということが、ある程度推察できなければならぬが、『立正観抄』にはその推察が殆ど不可能である。

まず考えられることは、日蓮滅後に誰かが『立正観抄』を偽作し、それをさらに日進が正中二年に書写したとする可能性である。しかしその場合、日進が奥書に「最蓮房之本御自筆」とまで明言していることは少し不可解であるし、何よりも日蓮滅後から正中二年の間、つまりわずか四十三年の間に『立正観抄』が京都において偽作されることなどまず考えられない。第一に、偽作できるような人師が当時の京都にはいない。又若し『立正観抄』が当時の京都において偽作されたとするならば、日進がそれを何の疑問も持たずに日蓮の真撰として書写することも不可解である。

次に考えられることは、日進が『立正観抄』を偽作したとする可能性である。然るに『立正観抄』については、他に大

石寺三世日目の弟子日朝の写本が現存しており、それは現在富久成寺に蔵されている。その奥書には「貞治三甲辰仲夏三日書写畢 執筆日朝」とあり、貞治三年（一三六四）は正中二年よりわずか三十九年後である。若し日進が『立正観抄』を偽作したとするならば、日朝がそれからわずか三十九年後に、しかも日蓮の遺文と認めてこれを書写したことになるが、そのようなことは殆ど考えられない。しかも當時は、大石寺開山日興の身延離山に濫觴せる五一の相對、所謂日興門下と他の五老門下の對立が存し、富士と身延の交流はまず考えられないから、身延の日進が偽作した書を富士の日朝が書写することなど到底ありえない。第一、日進が『立正観抄』を敢えて偽作するような動機が全く見つかからない。

このように文献的に『立正観抄』偽作論の可能性が全く考えられない以上、いかに思想内容からその真偽を疑つてみても、それが不当なることは明らかである。まず円道先生の偽作論について云えば、先生は真如隨縁論が見えるから『立正観抄』は偽書であろうと云われる。しかし思想内容からの批判というものは、論者の主観が多分に影響するから、それを直ちに真偽論にまで結びつけるのは不可である。『立正観抄』が文献的に真撰と考えられ、しかもその中に真如隨縁論が説かれて以上、日蓮に真如隨縁論はあつたと考えるべきで、真如論が見えるという理由によつて『当体義抄』や『日

女御前御返事」の真偽を疑うことは、もはや許されないのである。

家永三郎氏は、日蓮の思想の中に新旧両仏教の多様な要素を含むことを積極的に論証されたが、現今の宗学者は「純粹日蓮義」という指標を設定することによつて、日蓮の思想から他の思想要素(例えば中古天台義等)をできるだけ排除しようとしている。すなわち「純粹日蓮義」の立場から少しでも矛盾と感じられるものがあると、その一方を偽書として切り捨ててしまふのであるが、「純粹日蓮義」ということには、日蓮の思想を歴史を超越した全く独自のものとみる非学問的な態度が潜んでいる。日蓮はすでに存在した新旧両仏教の思想信仰からいかなる影響を受け、それをいかに消化したか、又日蓮はいかにして独自の法門を構築したか、という問題意識に立つて研究を進める時、日蓮の思想に多様な要素が存するのはむしろ当然であり、それを「純粹日蓮義」の立場から矛盾であるとして排除する態度こそ批判されなければならぬ。しかも日蓮は宝地房証真の如き体系的・理論的な学者ではなく、現実的・実践的な宗教家であつたから、時と所と人に応じて立言に多少の差異があるのはむしろ必至である。従つて我々が矛盾と感じても、当の日蓮においては矛盾でない場合もありえようし、日蓮にとつて矛盾が自覚されずに放置されている場合も考えられるから、「純粹日蓮義」の立場か

ら矛盾と感じられるものをもつて、直ちに真偽論にまで結びつけることは、よほど慎重でなければならぬと思う。具体的に云えば、日蓮の成仏論の基盤は一念三千論にあるから、真如縁縁論や心性蓮華説の見える日蓮遺文は疑わしいというが如き論は、もはや成立しないことである。

次に田村先生の偽作論について云えば、先生は禅勝止観の説や「灌頂玄旨血脈」の文が引用されているから、『立正観抄』は疑わしいと云われる。しかしそれは中古天台の爛熟期を日蓮滅後とする前提に立つて論じておられるからで、その前提自体にすでに問題がある。先生は中古天台文献の成立年代について、一つの仮説を提出され、その仮説に基づいて日蓮遺文の真偽を論じておられるが、その仮説自体にすでに問題がある以上、その真偽論も又問題があると云わざるを得ない。すなわち先生は、中古天台文献の時代設定を通して、禅勝止観の説や「灌頂玄旨血脈」の成立を日蓮滅後と見なし、その上から『立正観抄』に疑義を提出されている。しかし文献的に『立正観抄』偽作論の可能性が考えられない以上、いかに思想内容からその真偽を疑つてみても、それが不当なることは明らかで、むしろ『立正観抄』に見えるから、禅勝止観の説や「灌頂玄旨血脈」の書が日蓮当時すであつたと考へるべきである。

『立正観抄』に引かれたる天台大師の「灌頂玄旨血脈」や

伝教大師の「註血脈」と呼ばれる書は、有名な檀那流五箇の血脈印信の第一に収められたるものであり、彼の玄旨帰命壇と密接な関係にある血脈であるから、この書を日蓮が引いているという事は、当時すでに檀那流の玄旨帰命壇がある程度形を整えていたとも考えられるのである。日蓮が『立正観抄送状』に、「於天台一宗^チ流々^ニ雖^モ各別^ニ不出^テ慧心檀那^ノ兩流^ノ候也」と云っていることは、当時の中古天台が慧心檀那流を中心として多くの流派に分裂していたことを物語っており、このことからしても、当時すでに慧心流の面目たる三重七箇法門に対して、檀那流の誇りうる玄旨帰命壇の原形が成立していた可能性は充分に考えられるのである。しかも当時の玄旨帰命壇は、後世のそのように必ずしも墮落したものはなかつたであろう。日蓮の『立正観抄』を見る時、その他に四重興廢の説も引かれ、はては当世の天台宗において口伝法門の商品取引がなされていたことまで論じられているのであるから、『立正観抄』の真撰たることを文献的に信ぜざるを得ない以上、日蓮の当時中古天台は爛熟期を迎えており、日蓮はそのただ中に生存して、それらの教義を自己の思考の基盤としていたと考えざるを得ないのである。事実『立正観抄送状』には、「日蓮相承^ル法門血脈髓^{カニ}奉^ル註^シ之^ヲ」とあり、日蓮が中古天台の口伝法門に就つて、自己の観心の法門を相伝していたことが推察されるのである。

田村先生は、「純粹日蓮義」の確立という見地から、濃厚な中古天台教義の見える日蓮遺文を真偽論によつて排除しようとして、それを思想的に徹底させるために、中古天台文献の時代設定をできるだけ後世に下げようとした。しかし『立正観抄』の偽作論が文献的にみて不可能な今日、田村先生の時代設定は少し下げすぎではないかと思われるのであり、これからは日蓮に爛熟した中古天台の影響があつたことを認めて、その真偽論についても再考すべきではないかと思うのである。

註

(1) 奥書の文を「於^チ洛中三條京極^ニ最蓮房之本^ニ御自筆^ス有人書^ス之^ヲ」と読まずに、「於^チ洛中三條京極最蓮房之本^ニ御自筆^ス有人書^ス之^ヲ」と読む人もいるが、それは妥当ではないと思う。

(2) 「録内御書」の成立時期については異説があり、浅井要麟氏は祖滅百二、三十年ごろとされ、宮崎英修氏は祖滅百四、五十年ごろと推察されている。

他の註については省略するが、この小論とあわせて是非、拙稿「日蓮教学と修禪寺決」「純粹日蓮義確立の問題点」等を参照されたい。

付記

前年号の拙論に関して——中ノ川実範の『大経要義抄』巻七には、すでに天台宗の仏身論を「無作三身」という名目をもつて表現しているが、その内容は三身常住論であつて、凡夫実仏論ではない。